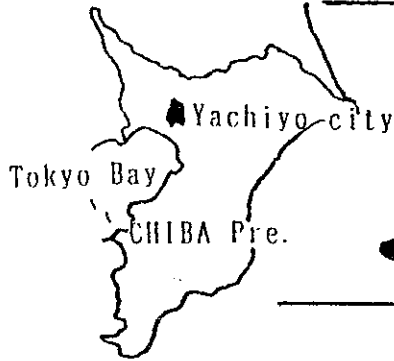




まい 埋やちよ

No. 4

千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
1999. 1. 29
(平成11年)

「上谷遺跡」見学会リポート

平成10年11月29日の日曜日に、八千代市保品の「上谷遺跡」において、遺跡見学会を行いました。正午から午後3時までと短い時間の開催でしたが、市内・市外を合わせ 373名もの考古学ファンの人たちが訪れてくれました。「上谷遺跡」における遺跡見学会は、今回で3回目を数えました。

上谷遺跡からは、縄文時代、弥生時代奈良・平安時代のムラの跡が見つかりました。特に、人面刻書土器・紀年銘入り人面墨書土器や「コ」の字状に配置された掘立柱建物群などを検出した奈良・平安時代のムラは珍しい遺跡です。

見学者は、調査員から説明を聞いたあと、設定された順路に沿って説明板を読みながら見学するだけでなく、遺跡内を自由に歩くこともでき、調査が完了した竪穴住居跡などに立ち入ることもできました。

遺跡見学の他に、人面刻書土器や紀年銘入り人面墨書土器をはじめ、土師器や須恵器などの土器、三彩陶器、帯金具、温石（おんじゃく）、鎌などの鉄製品、多量の墨書土器など、遺跡から出土した遺物の一部を展示しました。見学者は調査員の説明を聞きながら、間近でみることができました。

わいわいテレビにて放映した「平安時代の人面土器出土～土器が語る古代の八千代」のビデオ上映は、見学者には特に好評だったようです。この番組は、ふたつの人面土器について、国立歴史民俗博物館の平川南教授にお願いをして解説していただいたものです。

訪れてくれた人たちからは、「こんな身近に遺跡があるとは思わなかった。とても不思議な気分でした」、「町おこしの良い材料にしてもらいたい」、「また見せてほしい」といった感想を多くいただきました。

穏やかな晴天のもと、大盛況のうちに遺跡見学会は終了しました。機会がありましたら、また開催したいと考えております。

(蕨 茂美)



見学会のようす

遺物紹介 ヲイノ作南遺跡の縄文土器

— 整理作業を
通じて① —

この遺跡は、大和田新田字ヲイノ作地区の一角、東葉高速鉄道八千代緑が丘駅の東南約 500m のところに位置しています。平成 8 (1996) 年 8 月から 12 月にかけて発掘調査を行いました。その結果、縄文時代前期の竪穴住居跡 20 軒、縄文時代の落とし穴などの穴 23 基、溝 2 条を発見しました。また同時期の土器・石器が多数出土しています。

これらの発見された遺構・遺物について、報告書としてまとめる機会を得ました。まだ作業中ですが、この整理をとおしてわかってきたことを記してみたいと思います。今回は土器を取り上げます。

縄文時代前期は、土器の表面に縄をころがしたり、竹管状の施文具(せもんぐ)を押したり引いたりして文様をつけることが流行しました。また土器を作る粘土には、植物の細かい繊維を意図的に入れています。この傾向は関東地方を中心に東北・北海道にわたって見られます。

前期半ばの当地域の土器には、以下のような時間的な流れが認められます。

- ① 前時代からのこの地域の文様を受け継いでいる時期。
- ② 東北地方南部を中心に、長野・近畿地方などの文様の影響や、それらの地域の土器が直接入ってくる時期。
- ③ この地域独自の文様がつくられる時期。
- ④ 土器の粘土中に繊維が段々と入らなくなる時期。

という各段階です。では実際にどのような文様か見てみましょう。

①の土器

なかぐくもん
幾何学文

土器の拓本

土器の断面

こうしめもん
格子目文

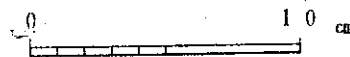
②の土器

りゅうたいもん
隆帯文あういせんのめもん
横位全面施文

③の土器

あつこつもん
肋骨文うじょうひしがたじょうもん
羽状菱形縄文

④の土器

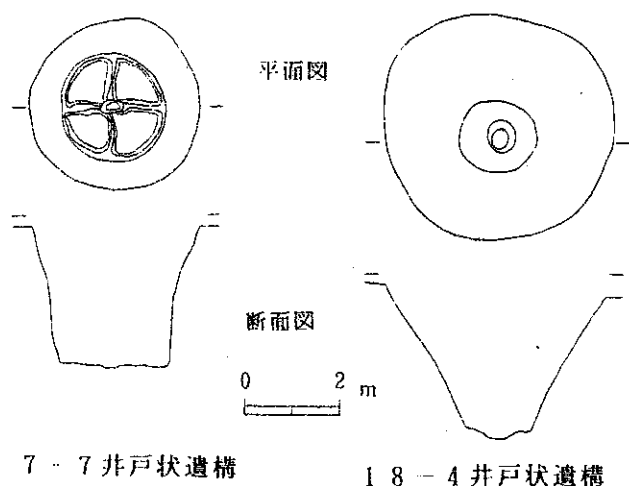
むせんい
無繊維だいはいじょうこうもん
大波状口縁

(森 竜哉・玉井庸弘)

上谷遺跡の井戸状遺構について

～井戸のようで
井戸じゃない～

上谷遺跡は市北東部大字保品の台地上に立地する集落跡です（page-1参照）。この上谷遺跡からは奈良平安時代の「井戸状遺構」と呼ばれる遺構が2基発見されています。7-7井戸状遺構と18-4井戸状遺構です。大きさは、7-7遺構が径約3.6m、深さ約2.9mの断面円筒形で、底部に⊕の形に溝が掘られています。18-4遺構は径約4.5m、深さ約3.1mの断面すり鉢形で底部には段がついています。これらの遺構はいずれも谷に面した標高24mほどの台地縁辺部に位置しており、赤土（関東ローム層）の下の粘土層まで掘り込まれています。



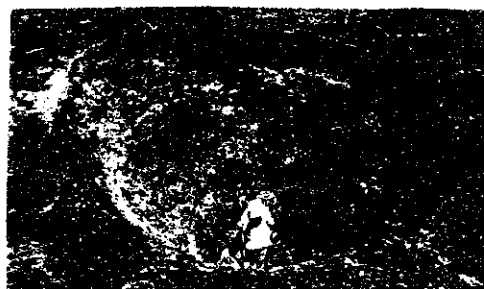
7-7井戸状遺構

18-4井戸状遺構

しかし、これらの遺構は「井戸状」遺構とは言えるものの、湧水地点まで掘り込んでいないため水は湧いてきません。低地や低位段丘などの微高地ならともかく台地上では3m前後掘っただけでは湧水地点まで届かないのです。台地上では最低でも10m以上は掘らないと水は湧いてきません。ちなみに上谷遺跡に近い大字神野の標高10m前後の低位段丘に掘られ

た井戸では3m前後、浅いところでは1m未満でも水が湧いてきます。

では、湧水が認められないのであれば雨水を溜めておくための井戸と考えることはできないでしょうか。しかし、雨が降って水溜まりができたとしても、この水溜まりも2～3日のうちに干上がってしまいます。つまり水を溜めることはできないのです。湧水も認められないし、水を溜めておくこともできないということは、井戸として機能していないことを意味しています。つまり井戸状遺構とは形態は井戸に似ているものの、井戸としては機能していない遺構のことなのです。それではこの遺構は一体何のために掘られたのでしょうか。同様の遺構は県内では20例以上調査されており、ゴミを捨てるためのゴミ穴説、食糧を貯蔵するための貯蔵穴説、井戸を模して掘り水に関わる祭祀を行った祭祀遺構説などが考え



18-4井戸状遺構

られています。深さが3m以上もある大きな穴ですから、重機もない時代に人力でこれを掘るのはたいへんな労力であったものと想像されます。当時の人びとはどんな目的でこの大穴を掘ったのでしょうか。用途は未だ不明のままです。

（武藤 健一）

